

自分の経験やノウハウで動く AI秘書を持つ

- 診断士のAI活用実践 -

AI秘書には「自分自身」を知っておいてもらわないといけない

01 プロンプト — 質問して、答えをもらう

02 アプリ — 定型業務を束ねる / AIを使ってアプリを自作する

03 エージェント — 自律的な判断や、ファイル操作などの作業を任せる

04 コンテキスト — ファイル、データ、経験、知識、感情、記憶、ルールをAIに持たせる

05 AI組織 — 複数のAIが連携、組織のように動く

コンテキストとは、AIに渡すすべての情報のことを言います。

プロンプト、エージェント、スキル、データ、ノウハウ、記憶、ルール・制約などが含まれます。

AI活用は「コンテキストが9割」

コンテキストが少ない

- コンテキストを持たないAIは、誰が出しても同じような回答になり、「自分らしさ」を出すことが難しい。
- 予定やタスクを教えてくれる秘書なら、カレンダーアプリを見ればいい

コンテキストが充実

- 自身の背景を踏まえた上で、AIから今必要な判断やアドバイスをくれる
- クライアントとの背景を覚えていて、面談準備・返信メール下書き・対応履歴の自動更新まで代わりに進めてくれる

■ 本編で話すこと

01 AI活用に大事なこと

02 「コンテキスト」の設計 — AIに脳・心・手足を持たせる

03 AIエージェント実演

04 AIと人間の役割をどう設計するか

05 今からできる準備

※今回は、「個人のAI活用事例」発表を想定しており、「企業のAI活用のポイント」は含まれません